

ラグビー競技場面における怒りに伴う攻撃行動の分析

長谷川 悦 示

An analysis of anger-related aggression in rugby football competition

HASEGAWA Etsushi

The purpose of this study was to describe the characteristics of anger-related aggression in rugby football players and to analyze correlations between several dimensions of responses on the basis of Averill's theory of the anger emotion as a response syndrome. 612 rugby players (283 high school students and 329 university students) answered a questionnaire on "the experience of anger toward opponent team players in sport competition." In this questionnaire they were asked to recall an episode involving intense anger they had recently experienced and to rate it in respect of instigations, motives, and responses.

The characteristics of anger experiences toward opponent players were that the experiences involved physical injury instigations, retaliative motives, physical aggression responses much more in competition than in the daily life, and that hostile, instrumental and reprovig dimensions were extracted from the motives, and that the experiences included several types of responses such as physical aggression, indirect aggression or non-aggressive response. The analysis of the relations of cognition with the intensity and motives of anger showed that the intensity was affected by the evaluations of the instigation, the causal attribution, and the perception of the opponent's hostile intent, and that the motives were differentiated and generated according to the kind of instigation. The relations of the intensity and motives of anger with aggressive behaviors made obvious that the types of directive aggressive behaviors were instigated by intense anger, and that the aggressive behaviors and/or non-aggressive behaviors were differentiated and induced according to the type of motives.

Key words : Anger emotion, Aggression, Episode questionnaire, Competition, Rugby

問 題

スポーツの試合場面における暴行や乱闘に関しては、FreudやLorenzの本能論、Dollardらの欲求不満—攻撃理論、Banduraの社会的学習理論などからの解明が試みられてきた^{1,14,21-23,26,28}など。本研究は其中でも特に、攻撃行動における怒りの情緒の役割に着目したAverill³⁾や大淵ら¹⁶⁾の考え方に基づいて、身体接触スポーツであるラグビーの試合中に怒りが引き起こされ、それが攻撃行動へと発現する過程を解明しようとするものである。

スポーツの攻撃行動に関する心理学的研究では、伝統的に、攻撃行動はそこに含まれる行動の目標にしたがって大きく2つのタイプに分類されてきた。すなわち、怒りによる反動的攻撃(reactive aggression)と、怒りによらないその他の目標のための手段的攻撃(instrumental aggression)である。この2つのタイプの攻撃行動は、長谷川ら¹⁰⁾と佐藤ら²⁴⁾によるラグビーおよび剣道選手を対象とした研究においても確認された。本研究において怒りによる攻撃行動に焦点をあてるのは、一つにその行動の多くが外観者にとって顕在的であ

り、また当事者たちにとっても極めて強烈な印象の情緒体験をあたえやすいことにある。これは競技場面での攻撃行動を究明するための有効な糸口であると同時に、対処策を講じなければならない重要な研究課題である。

またもう一点は本研究の理論的基盤としたAverill³⁾や大淵¹⁶⁾による怒りと攻撃行動の関係のとらえ方にある。これは一般に情緒(emotion)を反応症候群(response syndrome)とみなすもので、情緒においては、認知、動機づけ、生理、表出などの様々な水準において症状(反応)が起り、各水準での症状間にシステマティックな関連があることによってひとつの情緒体験が成立すると考えている¹⁷⁾。怒りの情緒を感じている人は、怒りの情緒特有の症候群に一致した様式で反応するのである^{注1)}。したがってここでは攻撃行動は怒りという情緒に伴うひとつの反応レパートリーであると考え。従来の攻撃行動に関する心理学的研究²⁰⁾のように、怒りを攻撃動因としてのみ扱うのではなく、怒りと攻撃行動の関係をもっと柔軟に考えている。

情緒を反応症候群とする考えに基づき、Averill³⁾は、怒りの経験を構成する各水準での反応を測定するために、エピソード質問紙法を考案した。これは、被験者に日常生活において最近、最も強く感じた怒りの出来事をひとつ想起させ、様々な観点からの自己評定を求めるものである^{注2)}。それらの反応水準のうちで、Averill³⁾が心理学的レベルでの怒りを構成する最も重要な水準として強調しているものは、①怒りの原因に関する評価：原因帰属(被験者による怒りの原因に関する不合理性、および回避可能性の判断)と悪意の知覚(被験者による相手の悪意の知覚)、②怒りの出来事に含まれる被害の特性(被験者により知覚された被害の特性)、③怒りに伴う道具的反応(怒りを感じた時に被験者が計画あるいは願望する行動と、怒りを感じた時に被験者が実際に実行する行動の2つの水準に分かれ、この項目に攻撃的行動が含まれている)、④怒りの動機(怒りによって引き起こされた行動により被験者が達成しようと目指す目標)の水準である。Averill³⁾と大淵^{16,17)}はこの質問紙を大学生と一般社会人に実施して、日常場面での怒りの経験における各反応水準の基礎的な特徴を記述的な分析により明らかにしている。また、大淵¹⁵⁾は林の数量化分析を用いて反応水準

間の関連性を検討している。

本研究ではこれらの研究の結果を受けて、怒りを喚起させる認知的要因(被害の知覚、原因帰属、悪意の知覚)および怒りの情緒的要因(怒りの強さ、怒りの動機)の反応水準を取り上げ、それらの水準間の関連性の検討から、競技場面において選手間で引き起こされる攻撃行動の発現過程を分析することを目的とする。まず競技場面における怒りの各反応水準の基礎的な特徴を、日常場面における大淵¹⁵⁻¹⁷⁾の研究結果と比較しながら明らかにする。怒りの動機と怒りに伴う反応については因子構造を示し、その次元・タイプの多次元性を明らかにする。ついで認知的要因と情緒的要因の関連性、さらに情緒的要因と怒りに伴う反応との関連性を検討する。

方 法

1) 調査票の作成

Averillの日常場面における怒りの経験質問紙について、調査者とラグビーの専門家2名の3名が、スポーツの競技場面に適合するように質問項目の表現と内容を修正して、「試合における怒りの経験」を作成した。予備調査として筑波大学のラグビー部部員99名とサッカー部部員93名を対象に、その作成された質問紙を実施して、質問項目の検討を行った。無回答の多かった一部の項目については部分的な改良を行った。

2) 質問紙の構成

a. 被験者の怒りの経験の全般的傾向 (1)過去1カ月間に被験者の出場した試合数。(2)怒りの頻度：過去1カ月間に出場した試合中にどれほど怒りを感じた出来事があったかについて7点尺度で評定させた。(3)怒りの対象：怒りを感じた出来事において、どんな対象、すなわち、被験者の怒りを喚起した人物・事柄が多かったかを次の6項目により評定させた。①「対戦チームの選手」、②「味方チームの選手」、③「審判」、④「自分自身」、⑤「指導者」、⑥「観衆」。各項目について、“あまり対象とならない(0点)”，“ときどき対象となる(1点)”，“よく対象となる(2点)”のどれかを選択させた。

b. 対戦チームの選手に向けられた怒りの経験 被験者に対して、過去1カ月間に出場した試合中において、対戦チームの選手に向けられた怒りの経験のうちで、最も強く怒りを感じた経験をひと

つ具体的に記述させた。過去1カ月間にそのような経験のない人はそれ以前の経験を記述させた。これ以降の質問はすべてここで記述した怒りの経験に関するもので、被験者にその出来事をできるだけ細部にわたって思い出すように求めた。

c. 怒りの原因に関する認知的評価 (1)原因帰属：被験者が怒りの原因となった出来事をどう判断しているかを、回避可能性と合理性の観点から4カテゴリーを設定して、そのうちひとつを選択させた。①「不注意」、②「事故」、③「合理的意図」(相手の自発的な行動であり、なおかつ正当な行動であった)、④「不合理な意図」(相手の自発的な行動であり、それは不当な行動であった)。(2)悪意の知覚：相手が被験者に悪意をもって危害を加えるつもりがあるように見えたかについて、①「そう見えた」、②「見えなかった」、③「何ともいえない」のうちどれかを選択させた。

d. 怒りの出来事に含まれる被害 怒りを感じた出来事において、どんな性質の被害を被ったかを次の5項目により評定させた。①「身体的被害」、②「欲求不満」、③「プライドの損傷」、④「仲間の被害」、⑤「道義違反」。各項目について被験者に、“全く含まれていない(0点)”, “含まれているが、重要な要素ではない(1点)”, “重要な要素として含まれている(2点)”のどれかを選択させた。

e. 怒りの強さ 怒りの強さについて、“ごくおだやかに(1点)”から“非常にげげしく(10点)”までの10点尺度で評定させた。

f. 怒りの動機 怒りによって被験者が達成しようとした目標、即ち、動機について、以下の動機8項目により評定させた。各項目について、“全く含まれていない(0点)”, “含まれているが重要でない(1点)”, “重要な動機として含まれている(2点)”のどれかを選択させた。①「過去の罪への仕返し」(これまで相手があなたに対して行ってきた罪に対する仕返し)、②「単純な仕返し」(単純に今度の出来事に対する仕返し)、③「別の期待」(自分のために相手にあることをさせたかった;例、あなたが怒ったのは、相手がすまないと思って謝ってくるのではないかと期待したから)、④「相手のための行動規制」(本人自身のために相手の行動を変えさせたかった;例、相手に選手として正しい行為をしてほしいため)、⑤「自分自身のための行動規制」(あなた自身の

都合で相手の行動を変えたかった;例、腹をたてたのは、そうすればもう相手から悩まされることはないだろうと考えたから)⑥「面目を保つ」(自分の権威や自律を主張したり印象を高めたと思った)、⑦「嫌悪の伝達」、⑧「うっぶん晴らし」。

g. 怒りに伴う反応 怒りを感じた時に人が示す反応のうちで、随意的行動を実行水準と願望水準に分けてたずねた。(1)実行された行動：怒りを感じた時に、被験者が実際にどのような行動をとったかを以下の10項目により評定させた。各項目について、“全くない(0点)”, “弱くあった(1点)”, “強くあった(2点)”のどれかを選択させた。直接的攻撃群：①「身体的攻撃」、②「プレイによる罰」、③「言語的攻撃」、④「態度的攻撃」。間接的攻撃群：①「告げ口」。攻撃転化群：①「人に八つ当たり」、②「物に八つ当たり」。非攻撃的行動群：①「怒りと反対の表現」、②「相手との冷静な話し合い」、③「心を鎮める」。(2)願望された行動：怒りを感じた時、被験者が心の中ではどのような行動をとりたと思ったか(たとえ実行しなくても)を同じ行動10項目により評定させた。

3) 調査の実施

本調査の標本は高校と大学のラグビー部員であった。高校生の標本については、茨城県内にある高校10校のラグビー部10チームに所属する高校生283名を対象とした。大学生の標本については、東北地方にある大学4校、関東地方1校、北陸地方1校、中部地方1校、四国地方1校、九州地方3校のラグビー部11チームに所属する大学生329名を対象とした。調査はチームごとに学校の教室等で集団で行った。また調査は平成元年6月上旬から7月上旬にかけて実施した。

4) 分析の対象とした標本

集められた612名の標本のうち、被験者により報告された怒りのエピソードが、「過去1カ月以内に出場した試合中に、対戦チームの選手に向けられた怒りの出来事であるもの」を有効標本とした。過去1月以内と限定したのは、記憶再生の信頼性をできるかぎり保ちたかったためである^{3,25)}。過去1カ月間に試合経験があった被験者は508名であった。そのうちその間の試合中における怒りの経験を報告した386名を有効標本とした。高校生は172名(1学年14名, 2学年70名, 3学年88名)、大学生は214名(1学年53名, 2学年63

名、3学年60名、4学年38名)であった。また、被験者のポジションによる内訳はフォワード207名、バックス179名とほぼ同じ割合であった。有効標本となった被験者の過去1カ月に出場した試合数は、平均でおよそ3試合であった。

結果と考察

怒りの経験の基礎的特徴

1) 怒りの頻度とその怒りの対象

過去1カ月間に出場した試合中(平均でおよそ3試合)に「怒りを一度も経験しなかった」と報告した被験者は51名であった。過去1カ月間に試合経験があった被験者を全体(508名)とすると、怒りを経験しなかったのはわずか10%ほどで、残りの90%の被験者はおよそ3試合に少なくとも1回以上の怒りを経験していた。最も頻繁に怒りを喚起する対象は「対戦チームの選手」で、96.4%の被験者が対象となると答えた。ついで順に、「自分自身」(72.0%)、「審判」(59.8%)、「味方チームの選手」(46.7%)、「指導者」(23.6%)、そして「観衆」(7.2%)であった。

2) 怒りの出来事に含まれる被害

その被害が多少なりとも含まれていたと評価した被験者の割合は、「道義違反」(85.0%)、「欲求不満」(65.8%)、「身体的被害」(59.6%)、「プライド損傷」(50.0%)、「仲間の被害」(47.9%)の順であった。日常場面での大淵ら¹⁶⁾の調査と比べても、「道義違反」は最上位で、8割以上の怒りに、また、「欲求不満」は6割以上の怒りに含まれていた。一方、競技場面では「身体的被害」は日常場面に比べておよそ3倍の被験者により、その怒りの出来事に含まれていたと評価された。また、上位2つの被害項目と他の被害項目との回答状況についてみると、それだけが単独で怒りの出来事に含まれることはなく、大概是直接的な心理的被害や身体的被害を伴っていた(5項目中、それだけを選択した被験者は、前者で1.3%(5名)、後者で1.8%(7名)にすぎなかった)。被験者の知覚された主観的な被害のいくつかの組合せが怒りの喚起に効果を及ぼしていると考えられる。

3) 怒りの原因に関する認知的評価

怒りの原因を、「不合理な意図」(59.3%)とする被験者が最も多かった。ついで、「不注意」(17.1%)、「事故」(12.2%)、「合理的意図」(11.4%)の順

に評価された。その原因を不合理な意図あるいは不注意と評価された怒りは、競技場面で全体の76.4%、日常場面¹⁶⁾で全体の86%を占めていた。これは加害者の行動が、意図的でしかも道理に反するか、そうでなければ、怠慢、不注意であると被験者が判断した時に、怒りが生じたことを示している。このことから多くの実験的研究^{8,16,27)}でも確認されているように、怒りが社会的認知判断に基づく対人的情緒であることは、競技場面での怒りについても当てはまるといえよう。しかし、その反面で、約2割近くの被験者が、相手の行為を合理的意図あるいは回避不能な事故によると判断しても、怒りは生じていた。これからは、こうした認知判断による認知的制御が完全なものではなく、競技場面における対戦選手に向けられた怒りにこの傾向の強いことが窺える。

もう一つの怒りの原因に関する評価の測度である悪意の知覚のカテゴリーに対する回答状況をみると、「悪意有り」と知覚した被験者は33.7%、また、「悪意無し」と知覚した被験者は19.4%で、残りの46.9%は「不明」であった。怒りの原因帰属と悪意の知覚の連関について、 χ^2 検定した結果、有意な連関が認められた($\chi^2=82.42$, $df=6$, $p<.01$)。残差分析の有意性の検定によれば、「不合理な意図」と原因を評価する被験者は、同時に「悪意有り」と評価する者が多い傾向を認められた(44.5%(102/229)。これは「悪意有り」と評価された怒りの78.5%(102/130)に相当した。しかし「合理的意図」と評価する被験者のうち、36.4%(16/44)が「悪意有り」と知覚していた。相手の行為が正当なものと評価されても、そこに悪意があるかどうかの判断は異なる観点からの評価とみられる。

4) 怒りの動機

Table 1は被験者に怒りの動機8項目について怒りに含まれていたかを評定させた結果を示す。「単純な仕返し」と「過去の罪への仕返し」の報復動機のどちらかを含むと評価した被験者は、74.4%であった。日常場面¹⁶⁾では55.4%であったことから、競技中に対戦選手に向けられた怒りの動機は日常場面に比べて報復的・敵意的であるものが多かった。対選選手に対して競技ルールに則った正当なプレイや行為を望む、「相手のための行動規制」の動機が含まれたと評価した被験者は50.0%で、この割合は2番目に高いものであった(日常

Table 1 怒りに含まれる動機

動機項目	平均評定値 ^a	評定値1と2に評定した被験者の% ^b
1. 単純な仕返し	.93	65.3
2. 相手のための行動規制	.70	50.0
3. 過去の罪への仕返し	.61	45.9
4. 自分のための行動規制	.47	37.3
5. 面目を保つ	.43	33.2
6. 別の期待	.41	31.6
7. うっぶん晴らし	.28	21.8
8. 嫌悪の伝達	.25	20.7

a 0=全く含まれない; 1=含まれているがそれほど重要でない;
2=重要な動機として含まれている。

b N=386.

場面では最上位で66%)。Averill³⁾は、怒りは社会的価値基準の非公式な執行形態で、それによって集団成員が相互に行動をチェックし、逸脱した行動を是正するように働く社会的統制の機能を果たしていると主張しているが、この考えはスポーツの競技場面についても成り立つようである。その他の動機については日常場面の結果とほぼ等し

い割合であった。

競技場面における怒りの動機の因子構造を検討した。怒りの動機8項目の評定値間の相関行列から直ちに主因子解を求めたところ、固有値1以上の因子が3つ得られた。Table 2は3因子に対するパリマックス回転後の因子負荷を示す。3因子の全分散に対する累積寄与率は、56.9%であった。

Table 2 怒りの動機項目の因子分析

動機項目	平均評定値の順位	回転後の因子負荷		
		I	II	III
面目を保つ	5	.80	-.07	.06
自分のための行動規制	4	.69	.08	.17
嫌悪の伝達	7	.61	.20	.03
うっぶん晴らし	8	.55	.32	-.07
単純な仕返し	1	.01	.82	-.00
過去の罪への仕返し	3	.30	.67	.13
相手のための行動規制	2	.00	-.13	.86
別の期待	6	.15	.31	.67
寄与率		23.79	17.35	15.55

N=386.

因子Ⅰは、「面目を保つ」,「自分のための行動規制」,「嫌悪の伝達」,「うっぶん晴らし」の動機項目に高い因子負荷を示した。これらの動機では、相手への敵意を含まない、それ以外の目標、たとえば、自分のプライドや威信を回復させる、対戦選手に恐怖心を起こさせるなどが目指されている。そこで因子Ⅰは“道具的動機”と命名した。因子Ⅱは、「単純な仕返し」および「過去の罪への仕返し」の2つの動機項目にだけ高い因子負荷を示した。これらの動機は、報復を目指し、相手に苦痛を与える敵意を含んでおり、この因子を“敵意的動機”と命名した。因子Ⅲは、「相手のための行動規制」と「別の期待」の2つの動機項目に高い因子負荷を示している。この前者の動機には、不正を為した相手の行動を社会的に望ましい方向、すなわち、競技のルール・規範に則った正当なプレイ・行為に修正したいという目標が含まれている。また後者には、そうした不正なプレイに対する謝罪や責任の要求が含まれている。両者の動機の背後には、スポーツの競技場面における競技者間の平等性、互惠性を保とうとする強い価値基準が働いていると考えられる。そこでこの因子を、相手への敵意を含まず、相手にその不正行為を気づかせ、それを改めることを促すことを

目指した、“叱責的動機”と命名した。

第3の因子に負荷の高い2つの動機は、大淵ら¹⁷⁾の日常場面での研究においては“道具的動機”の因子に含められた。本研究と動機項目が若干異なるためこうした違いが生じたかもしれない。しかし、これらは怒りを利用して相手の行動を統制しようとしている点で、確かに道具的であるが、その内容には違いがみられるように思われる。一般に怒りの道具的動機と言っても、自分の利害だけを追求する利己的なものと、その対極に他者や社会全体の利益を第一に尊重する利他的なものがある。スポーツの競技場面においても個人的利害の追求やチームの戦略的有利を目指す怒りと、一方では試合に参加する選手全員の利益を尊重するための怒りがあるように思われる。したがって、本研究での第1因子は前者を表し、この第3因子の動機は、後者を表していると考えられる。

5) 怒りに伴う反応

Table 3は、怒りに伴う反応の願望率、実行率を示す。「身体的攻撃」,「プレイによる罰」の願望率は79.0%と高いが、実行率はそれぞれ23.1%、51.8%と大きく低下した。かわって強度の低い「言語的攻撃」は願望率では72.3%と3番目であったが、実行率では60.9%と他の直接的攻撃の項目の

Table 3 怒りに伴う手段的行動

反 応 項 目	評定値 ^a 1と2に評定した被験者の% ^b	
	願望率	実行率
<u>直接的攻撃</u>		
プレイによる罰	79.0	51.8
身体的攻撃	79.0	23.1
言語的攻撃	72.3	60.9
態度的攻撃	48.7	38.6
<u>間接的攻撃</u>		
告げ口	24.1	19.4
<u>攻撃転化</u>		
物に八つ当たり	20.5	23.3
人に八つ当たり	17.9	14.8
<u>非攻撃行動</u>		
心を鎮める	62.2	61.4
冷静な話し合い	14.8	7.3
反対の表現	13.2	11.1

a 0=全くしたいと思わなかった (しなかった) ; 1=弱くしたいと思った (行った) ; 2=強くしたいと思った (行った) .

b N=386.

うち最も高かった。日常場面¹⁶⁾では、言語・態度による攻撃は願望率82.8%，実行率53.7%とともに最も高く、「身体的攻撃」は、約半数44.0%の被験者により願望されたが、実行したのはわずか6.5%であった。競技中に対戦選手に向けられた怒りの場合、日常場面の怒りと比べて身体的な直接的攻撃行動が多く伴いやすいといえる。間接的攻撃の「告げ口」と攻撃転化行動の「物に八つ当たり」と「人に八つ当たり」については、約20%前

後の被験者によって願望され実行された。また、これらのいずれかの反応は、約4割の被験者に願望され実行され、日常場面とほぼ同じ割合であった。非攻撃的行動の「心を鎮める」、「相手との冷静な話し合い」、「怒りと反対の表現」のいずれかは、被験者の68.9%により願望され、66.1%の被験者により実行された。そのうち「心を鎮める」が突出していて、6割の被験者により願望され、実行された。これは日常場面の結果とほぼ同じ割

Table 4 願望水準における怒りの反応項目の因子分析

反 応 項 目	平均評定値 の順位	回転後の因子負荷		
		I	II	III
身体的攻撃	2	.81	.07	.06
プレイによる罰	1	.69	-.02	.01
態度的攻撃	5	.66	.22	.14
言語的攻撃	3	.45	.32	-.29
人に八つ当たり	8	.09	.70	.07
物に八つ当たり	7	.05	.70	-.00
告げ口	6	.14	.65	.17
反対の表現	10	.07	-.11	.80
冷静な話し合い	9	-.03	.20	.76
心を鎮める	4	.05	.16	.22
寄 与 率		18.02	16.38	14.12

N=386.

Table 5 実行水準における怒りの反応項目の因子分析

反 応 項 目	平均評定値 の順位	回転後の因子負荷			
		I	II	III	IV
人に八つ当たり	8	.72	.27	-.08	.01
告げ口	7	.66	.08	.07	.06
物に八つ当たり	6	.62	-.31	.10	.21
プレイによる罰	3	.16	.82	-.07	.00
身体的攻撃	5	-.03	.71	.17	.27
反対の表現	9	-.03	-.06	.79	.10
冷静な話し合い	10	.06	.11	.67	-.04
心を鎮める	2	.17	-.09	.34	-.62
言語的攻撃	1	.17	.02	.06	.67
態度的攻撃	4	.21	.18	.27	.57
寄 与 率		14.76	13.97	12.97	12.91

N=386.

合であった。一方、「怒りと反対の表現」,「相手との冷静な話し合い」は1割程度の被験者によってしか願望され、実行されなかった。

ここで願望水準の行動および実行水準の行動のそれぞれについて因子構造を検討した。因子分析の手法は、怒りの動機に用いたものと同じである。Table 4 と Table 5 はそれぞれのバリマックス回転後の因子負荷を示す。願望水準での怒りに伴う反応は3因子構造を、実行水準では4因子構造を示した。それぞれの全分散に対する累積寄与率は、48.5%, 54.6%であった。願望水準の3因子は順に、“直接的攻撃”, “間接的攻撃”, “非攻撃的行動”と解釈した。また実行水準の4因子は順に, “間接的攻撃”, “身体的攻撃”, “非攻撃的行動”, “言語的攻撃”とした。願望水準と実行水準の行動の因子構造は、よく一致していたが、願望水準での“直接的攻撃行動”は、実行水準では“身体的攻撃行動”と“言語的攻撃行動”の2つの因子に分かれた。これは、2つのタイプの攻撃行動はともに願望されやすいが、実行に際しては身体的な攻撃に内的抑制が強く働き、その行動が現れにくかったのに対して、言語・態度による攻撃は相対的に表出しやすかったためと考えられる。

6) まとめ

競技場面での怒りの経験の全般的傾向として、怒りは対戦チームの選手に最も向けられた。対戦選手に向けられた怒りの経験の特徴として、身体的被害、報復的な動機、身体的攻撃行動が、日常場面に比べて多くの怒りの経験に含まれていた。また原因の評価が合理的な意図や事故であるとされた怒りが競技場面において多かったことから、日常場面で通常はたらく認知的制御の機能が競技場面においては低下することが示唆された。しかし、怒りの経験には様々な被害、動機、および反応が含まれる反応症候群であること、また身体的攻撃の発現は強く抑制されやすく、言語や態度による強度の低い攻撃反応が表出しやすいことなどの特徴は、日常場面における怒りの経験と同じであった。また、怒りの動機には、敵意的動機、道具的動機、叱責的動機の因子が認められ、日常場面と同様に敵意的動機と非敵意的動機の次元の存在することや、怒りに伴う反応には、日常場面と同様に、直接的攻撃行動以外の多様な反応タイプの存在することが明らかにされた。

怒りの反応水準間の関連性

1) 怒りの強さおよび動機と認知的要因の関連性

競技場面での対戦選手に向けられた怒りの情緒の喚起に対して、認知的要因がどのような効果を及ぼすかを検討するため、怒りの強さと怒りの3つの動機をそれぞれ基準変数とし、5つの被害と2つの原因の評価の計7変数を説明変数とする、林の数量化分析I類を実行した。

Table 6 は怒りの強さの要因分析での各説明変数のカテゴリー・ウェイトを示す。重相関係数は、 $R = .40$ ($R^2 = .16$)であり、有意であった ($F(7, 378) = 10.50$, $p < .01$)。各説明変数の規定力の程度は偏相関係数の大きさから、また、その効果の内容は各説明変数のカテゴリー・ウェイトの大きさから解釈した¹¹⁾。

被害項目で偏相関係数の有意であったものは、「プライド損傷」,「身体的被害」,「道義違反」であった。これらは“強く有り”に正のウェイトが、また“無”に負のウェイトがあり、したがって、被験者が相手の行為が競技ルール等に違反し、身体的苦痛を受けたり、プライドを傷つけられたと強く知覚するほど、怒りは強く喚起されやすいことが示された。原因の評価では、「原因帰属」と「悪意の知覚」のいずれも効果を示した。「原因帰属」については、相手の行為を不合理な意図によると評価した時に、怒りは最も強く喚起されやすく、逆に回避不可能な事故と評価した場合には、怒りは生じにくかった。一方、「悪意の知覚」については、相手が自分に悪意を持っていると知覚した時、怒りは生じやすく、悪意無しと知覚した時は、逆に、怒りは生じにくかった。原因帰属と悪意の知覚には、有意な連関があることを考え合わせると、被験者が怒りの原因を不合理でしかも悪意のある意図と評価した時、最も強く怒りは喚起され、逆に、回避不能な事故で相手に悪意がないと評価した場合には、最も怒りは生じにくかった、と考えられる。

怒りの動機の分析結果についてみる。各動機因子の重相関係数は以下のとおりいずれも有意であった。敵意的動機、 $R = .37$, $R^2 = .14$, $F(7, 378) = 8.50$, $p < .01$; 道具的動機、 $R = .39$, $R^2 = .14$, $F(7, 378) = 9.92$, $p < .01$; 叱責的動機、 $R = .25$, $R^2 = .06$, $F(7, 378) = 3.57$, $p < .01$ 。

Table 7 は各説明変数のカテゴリー・ウェイトを示す。敵意的動機の形成に効果の認められた被

Table 6 数量化分析Ⅰ類による怒りの強さの要因分析：カテゴリー・ウェイト

説明変数	カテゴリー	度数	怒りの強さ
身体的被害			**
	無	156	-.34
	弱く有り	92	.01
	強く有り	138	.37
欲求不満	無	132	.02
	弱く有り	110	-.09
	強く有り	144	.05
プライド損傷			***
	無	193	-.27
	弱く有り	92	-.02
	強く有り	101	.54
仲間の被害	無	201	.01
	弱く有り	99	-.04
	強く有り	86	.04
道義違反			*
	無	58	-.58
	弱く有り	96	-.03
	強く有り	232	.16
原因帰属			**
	事故	47	-.59
	合理的意図	44	-.23
	不注意	66	-.30
	不合理な意図	229	.25
悪意の知覚			**
	悪意有り	130	.44
	不明	181	-.19
	悪意無	75	.14
重相関係数			.40

N=368.

第1カテゴリーのアステリスクはその変数の偏相関係数の有意性を表す。

*** p<.001, ** p<.01, * p<.05.

害項目は、「身体的被害」、「プライド損傷」、「欲求不満」であった。これらはいずれも“強く有り”に正のウェイトが、また“無”に負のウェイトが認められた。これより、被験者が身体的苦痛を受け、プレイの阻害等の欲求不満を感じ、プライドを傷つけられたと強く知覚するほど、相手に対する報復行動を目指す、敵意的動機は強く形成され

やすいことが示された。原因の評価では、「悪意の知覚」の偏相関係数が有意であった。相手が自分に悪意を持っていると知覚した時、敵意的動機は強く喚起され、悪意がないと知覚した時は、逆に、敵意的動機は生じにくかった。一方、「原因帰属」は有意な効果がみられなかった。この動機因子の形成においては、原因が何であるかによっ

Table 7 数量化分析Ⅰ類による怒りの動機因子の要因分析：カテゴリー・ウェイト

説明変数	カテゴリー	度数	敵意的動機	道具的動機	叱責的動機
身体的被害 ***					
	無	156	-.22	-.02	.01
	弱く有り	92	.05	.08	.04
	強く有り	138	.22	-.03	-.01
欲求不満 ***				**	
	無	132	-.23	-.09	-.06
	弱く有り	110	.15	-.14	.05
	強く有り	144	.10	.18	.01
プライド損傷 ***				***	
	無	193	-.12	-.25	.00
	弱く有り	92	-.09	.09	.04
	強く有り	101	.31	.39	-.04
仲間の被害					†
	無	201	-.02	-.05	-.05
	弱く有り	99	.10	.07	-.05
	強く有り	86	-.06	.04	.17
道義違反					**
	無	58	-.09	.14	-.20
	弱く有り	96	-.05	.00	-.20
	強く有り	232	.04	-.04	.13
原因帰属				***	
	事故	47	.04	.13	-.20
	合理的意図	44	.03	.10	-.08
	不注意	66	-.03	.31	.03
	不合理な意図	229	.00	-.14	.05
悪意の知覚				**	
	悪意有り	130	.07	.17	-.02
	不明	181	.06	-.02	-.04
	悪意無	75	-.26	-.24	.13
重相関係数			.37	.39	.25

N=368.

第1カテゴリーのアスタリスクはその変数の偏相関係数の有意性を表す。

*** p<.001, ** p<.01, * p<.05, † p<.10.

て、その後の行動をいかにするか、といった認知的制御は関係しなかったようである。一つの解釈として、敵意的動機の喚起しやすい時が、心理的被害や身体的被害の大きい場合であるため、それに伴う強い生理的覚醒が、こうした認知的制御をうまく機能させなかったと考えることができる。怒りの動機因子と怒りの強さの相関は全体的に弱いものであるが、敵意的動機で $r = .28$ ($p < .01$)、道具的動機で $r = .14$ ($p < .01$)、叱責的動機で $r = .16$ ($p < .01$) であった。ここからは怒りが強く喚起された状態で、他の動機因子に比べて、

敵意的動機が伴いやすいことが窺える。

次に、道具的動機の形成に効果のあった被害項目は心理的被害である「プライド損傷」と「欲求不満」であった。この効果の内容は敵意的動機と同様で、被験者がこれらの性質の被害を受けたと知覚した程度に応じて、道具的動機を形成されやすかった。しかし、この動機因子に対しては、敵意的動機に効果を及ぼした、「身体的被害」の程度は関係しなかった。原因の評価は「原因帰属」と「悪意の知覚」のいずれの偏相関係数も有意であった。「原因帰属」の効果については、被験者

が怒りの原因を“不合理な意図”によると評価した場合には、道具的動機は生じにくい、他の3つのカテゴリーの時には形成されやすかった。このように原因帰属による認知的制御がこの動機因子の形成に関係していた点は、敵意的動機と異なっていた。また、「悪意の知覚」の効果については、敵意的動機と同様に、相手が自分に悪意を持っていると知覚した時、道具的動機は生じやすく、悪意がないと知覚した時は、逆に、道具的動機は生じにくかった。

最後に、叱責的動機の形成に効果を及ぼした被害項目は、「道義違反」であった。また、「仲間の被害」については有意な傾向がみとめられた。これらから相手の行為が競技ルール等に違反している、また味方（チーム）が大きな損害を受けたと強く知覚するとき、叱責的動機は形成されやすことが示された。なお他の2つの動機因子の形成に効果のあった直接的な身体的被害や心理的被害は、この動機因子には効果を及ぼさなかった。また原因の評価の2つの変数の効果は有意でなかった。

2) 攻撃行動と怒りの強さおよび動機の関連性

怒りに伴う反応の因子構造は願望水準と実行水準でよく一致していた。そこで両水準ごとに、身体的攻撃、言語的攻撃、間接的攻撃、非攻撃的行動の4つの反応タイプの得点を算出した。いずれも当該する反応項目の得点を単純加算した得点である。

Table 8 はこれら4つの反応タイプの願望と実行の2水準と、怒りの強さおよび怒りの動機との相関係数を示している。まず、怒りの強さと.20

以上の相関係数がみられた反応タイプは、願望と実行の両水準の身体的攻撃と実行水準の言語的攻撃で、その他の間接的攻撃と非攻撃的行動との関連性はみられなかった。怒りの強度が激しいときほど、直接的攻撃行動が願望され、それは実際に引き起こされやすことが示された。一方、怒りの動機の効果についてみると、敵意的動機と.20以上の相関係数を示した反応タイプは、身体的攻撃の両水準だけであった。相手に苦痛を与える敵意をもち報復を目指す、この動機を強く含む怒りは、身体的な攻撃行動が伴いやすことがわかった。また道具的動機は、非攻撃的行動を除く、3つの攻撃的反応タイプの両水準と関連性を示した。道具的動機を強く含む怒りでは、その目標の達成のために多様なタイプの行動が願望され、実行されることが示された。そして、叱責的動機と関連したものは両水準の非攻撃的行動と、実行水準での言語的攻撃であった。他者が公正な行動を取るように願う叱責的動機が強い怒りでは、覚醒を押さえようとする内的な抑制が強く働き、そのため表出する反応も言語的な攻撃となるようであった。

3) まとめ

反応水準間の関連性の分析からは、競技場面での攻撃行動の発現過程における認知、動機、行動のシステマティックな構造をみることができる。ここで怒りの動機を中核に整理してみると、敵意的動機の形成は、身体的被害、プライド損傷、欲求不満の被害と、悪意の知覚によって影響を受け、この動機は身体的攻撃を引き起こす機能をもっていた。また道具的動機の形成は、プライド損傷と

Table 8 怒りの強さおよび動機と反応との関連性

	願望水準				実行水準			
	身体的攻撃	言語的攻撃	間接的攻撃	非攻撃的行動	身体的攻撃	言語的攻撃	間接的攻撃	非攻撃的行動
怒りの強さ	.43 ***	.17 ***	.09 *	.03	.33 ***	.40 ***	.07	.05
敵意的動機	.35 ***	.11 *	.12 *	-.00	.29 **	.11 *	.13 **	-.03
道具的動機	.23 ***	.37 ***	.31 ***	.08	.21 ***	.27 ***	.33 ***	-.02
叱責的動機	.14 **	.18 ***	.16 ***	.20 ***	-.01	.25 ***	.13 **	.20 ***

N=386. * p<.05, ** p<.01, *** p<.001. .20以上の相関係数は太字ゴシック体で記した。

欲求不満の心理的被害と、原因帰属と悪意の知覚によって影響を受け、この動機は身体的、言語的、間接的のいずれの攻撃行動の反応タイプにも促進機能を及ぼした。そして、叱責的動機の形成は、道義違反と仲間の被害によって影響され、この動機は非攻撃的行動を引き出す機能と、また強度の低い言語的と間接的の攻撃行動を引き起こす機能をもっていた。

これらの攻撃行動に及ぼす怒りの動機の機能やそれを形成する認知的要因の機能については、多くの点で日常場面での怒りの研究結果を追証するものである^{15,16)}。特に、敵意的動機の直接的攻撃行動を促進する機能、道具的動機の多様な反応タイプを促進する機能については一致していた。しかし、被害の動機形成における分化機能や、叱責的動機の攻撃行動に対する抑制機能などの点については、これまであまり明らかにされていなかった知見である。また従来、日常場面やスポーツ場面での攻撃研究において攻撃の指標とされてきた怒りの強さは、プライド損傷、身体的被害、道義違反の被害、原因帰属と悪意の知覚によって影響を受け、これは身体的と言語的の直接的攻撃行動に促進効果をもっていた。この怒りの強さに関する結果もやはり先行の日常場面での攻撃研究^{8,20,27}など)で得られた知見がスポーツの競技場面においても支持されることを示すものであった。

ところで、情緒的要因に及ぼす認知的要因の規定力が、怒りの強さに対しては全分散の16%、敵意的動機と道具的動機で14%、叱責的動機で6%と低かった。動機の形成にはその他の様々な要因が関与していることを示している。これには、たとえばその人のもつ価値基準や道徳的水準^{4,5,19)}や攻撃性という複合的で安定した人格特性^{12,18)}、さらに認知的帰属の偏り^{6,7)}などが大きく影響していると考えられる。今後、これらの個人差要因が、本研究での認知的要因や情緒的要因、さらには怒りに伴うタイプにどれほどの規定力をもつか検討していくことが必要である。また競技種目の違いによる怒りの経験における構造や、怒りを喚起する対象の違いによる怒りの経験における構造について検討することも今後の研究課題である。

要 約

本研究では Averill らの情緒を反応症候群とす

る考えを基盤として、ラグビー競技場面での選手間で発生した怒りの情緒について、その基礎的特徴と反応水準間の関連性を明らかにしようとした。Averill の考案したエピソード質問紙法をスポーツ競技場面に適合するように修正した「試合における怒りの経験」調査票を作成し、それを高校生283名と大学生329名のラグビー部部員の612名に実施した。このうち過去1カ月以内に出場した試合中に、対戦選手に向けられた怒りの出来事を報告した368名(高校生172名、大学生214名)を有効標本とし分析の対象とした。分析の結果、次の諸点が明らかとなった。

競技場面での対戦選手に向けられた怒りの経験の特徴として、①身体的被害、報復的動機、身体的攻撃行動が、日常場面に比べて多くの怒りの経験に含まれていた。②また、怒りの動機には、敵意的動機、道具的動機、叱責的動機の因子が認められ、日常場面と同様に敵意的動機と非敵意的動機の次元の存在することが示された。怒りに伴う反応には、日常場面と同様に、直接的攻撃行動以外の多様な反応タイプの存在することが示された。

怒りの情緒の喚起に及ぼす認知的要因の効果については、③認知的要因の被害、原因帰属、悪意の知覚はいずれも、怒りの強さの程度を規定する働きを示した。④被害は、怒りの動機のタイプを分化させ、その動機の形成を促進する働きを示した。悪意の知覚は道具的動機と敵意的動機の形成に促進する働きを示した。原因帰属は、道具的動機の形成にのみ関与していた。

攻撃行動の発現に及ぼす怒りの情緒的要因の効果については、⑤怒りの強さは、怒りに伴う反応タイプのうち身体的と言語的の直接的攻撃行動を促進する働きを示した。⑥怒りの動機は、怒りに伴う反応のタイプを分化させ、その反応の発現を促進する働きを示した。

注

注1) Averill は次のように怒りを定義している。「怒りは、一つの社会的に構成された反応である。それは不当と知覚された事柄に対して、報復の脅威を与えることで、対人関係を制御するのに役立つ。そしてまた故意に他者に危害を与えることに対する一般の文化的な禁止を破らない程度の、行動

(action) というよりは、むしろ、激情 (passion) と解釈される」(p.71)²⁾。また、「怒りは一つの葛藤した情緒として定義される。それは生物学的レベルでは、攻撃システムや、協調的な社会生活、象徴化および反映的自己知覚の能力(自分の行動をルールに従ってモニターする能力)に関わる。心理学的レベルでは、ある不当と評価した行為の是正をねらうものである。さらに、社会文化的レベルでは、承認された行動規範を是認する機能をもつものである」(p.317)³⁾。これらではやや強調点は異なるが、怒りとは知覚された社会的不正に対する憤りの反応であること、そしてその背後には他者の行動について、社会的規範や道徳的基準による高度に社会性を帯びた認知が働いている、と述べている^{9,25,29)}。

注2) Averillの質問紙は、①怒りを喚起した対象者、②怒りの原因に関する評価、③怒りの出来事に含まれる被害の特性、④怒りの経験の前後状況、⑤怒りに伴う道具的反応、⑥怒りに伴う生理的・表出的反応、⑦行動後の被験者の認知的変化、⑧怒りの動機、⑨行動時の状況、⑩相手の反応、⑪行動後の感情の変化、⑫怒りの経験の全体的評価についての計88項目からなっている³⁾。

引用文献

- 1) Arms RL, Russell GW, and Sandilands ML (1979) : Effects on the hostility of spectators of viewing aggressive sports. *Social Psychology Quarterly* 42 : 275-279.
- 2) Averill JR (1979) : Anger. (Eds.) Howe H, and Dienstbier R (In) *Nebraska symposium on motivation 1978 (Vol.28)*, University of Nebraska Press, Lincoln, pp. 1-80.
- 3) Averill JR (1982) : Anger and aggression : An essay on emotion. Springer-Verlag, New York.
- 4) Bredemeier BJ (1983) : Athletic aggression : A moral concern. (Ed.) Goldstein JH (In) *Sports Violence*, Springer-Verlag, New York, pp. 47-81.
- 5) Bredemeier BJ (1985) : Moral reasoning and the perceived legitimacy of intentionally injurious sport acts. *Journal of Sport Psychology* 7 : 110-124.
- 6) Dodge KA (1980) : Social cognition and children's aggressive behavior. *Child Development* 51 : 162-170.
- 7) Dodge KA, and Tomlin A M (1987) : Utilization of self-schemas as a mechanism of interpretational bias in aggressive children. *Social Cognition* 5 : 280-300.
- 8) Ferguson TJ, and Rule BG (1983) : An attributional perspective on anger and aggression. (Eds.) Geen RG, and Donnerstein EI (In) *Aggression : Theoretical and empirical reviews (Vol. 1)*, Academic Press, New York, pp. 41-74.
- 9) Graham S, and Weiner B (1986) : From an attributional theory of emotion to developmental psychology : A round-trip ticket? *Social Cognition* 4 : 152-179.
- 10) 長谷川悦示・佐藤成明・竹田清彦(1992) : 競技水準の上昇に伴うラグビー選手の攻撃性の発達. *筑波大学体育科学系紀要* 15 : 67-80, 1992.
- 11) 駒澤 勉(1982) : 数量化理論とデータ処理. 朝倉書店, 東京.
- 12) Kornadt HJ (1982) : Aggressionsmotiv und Aggressionshemmung. Hans Huber, Bern.
- 13) Kornadt HJ (1984) : Motivation theory of aggression and its relation to social psychological approaches. (Ed.) Mummendey A (In) *Social psychology of aggression*. Springer-Verlag, Berlin, pp. 21-31.
- 14) Lefebvre LM, Leith L, and Bredemeier BB (1980) : Modes for aggression assessment and control : A sportpsychological examination. *International Journal of Sports Psychology* 11 : 11-21.
- 15) 大淵憲一(1986) : 質問紙による怒りの反応の研究 : 攻撃反応の要因分析を中心に. *実験社会心理学研究* 25 : 127-136.
- 16) 大淵憲一・小倉左知男(1984) : 怒りの経験(1) : Averillの質問紙による成人と大学生の調査状況. *犯罪心理学研究* 22 : 15-35.
- 17) 大淵憲一・小倉左知男(1985) : 怒りの動機 : その構造と要因及び反応との関係. *心理学*

- 研究 56 : 200-207.
- 18) Olweus D (1984) : Development of stable aggression reaction patterns in males. (Eds.) Blanchard BJ, and Blanchard DC (In) *Advances in the study of aggression* (Vol. 1), Academic Press, London, pp. 103-137.
 - 19) Rule BG, and Ferguson TJ (1984) : The relations among attribution, moral evaluation, anger, and aggression in children and adults. (Ed.) Mummendey A (In) *Social psychology of aggression*, Springer-Verlag, Berlin, pp. 143-155.
 - 20) Rule BG, and Nesdale AR (1976) : Emotional arousal and aggressive behavior. *Psychological Bulletin* 83内9 6 A C 851-863.
 - 21) Russell GW (1981) : Spectator moods at an aggressive sports event. *Journal of Sport Psychology* 3 : 217-227.
 - 22) Russell GW (1983) : Psychological issues in sports aggression. (Ed.) Goldstein JH (In) *Sports violence*. Springer-Verlag, New York, pp. 157-181.
 - 23) Russell GW, and Russell AM (1984) : Sports penalties : An alternative means of measuring aggression. *Social Behavior and Personality* 12 : 69-74.
 - 24) 佐藤成明・長谷川悦示・市村操一 (1991) : ラグビーおよび剣道選手の競技場面における攻撃性. *筑波大学体育科学系* 14 : 65-77.
 - 25) Scherer KR, Wallbott HG, and Summerfield AB(1986) : Experiencing emotion : A cross-cultural study. Cambridge University Press, Cambridge.
 - 26) Silva JM (1983) : The perceived legitimacy of rule violating behavior in sport. *Journal of Sports Psychology* 5 : 438-448.
 - 27) Tachibana Y, and Hasegawa E (1986) : Aggressive responses of adolescents to an hypothetical frustrative situation. *Psychological Reports* 58 : 111-118.
 - 28) Vaz ET (1979) : Institutionalized rule violation and control in organized minor league hockey. *Canadian Journal of Applied Sport Sciences* 4 : 83-90.
 - 29) Weiner B, Graham S, and Chandler C (1982) Pity, anger, and guilt : An attributional analysis. *Personality and Social Psychology Bulletin* 8 : 226-232.